

話者の心的態度と統語現象

— daß 補文をめぐる —

三 瓶 裕 文

1. はじめに

本稿の目的は、daß 補文を含む複合文において、話者が補文命題に対してとる「心的態度」が、daß 補文に関わる多様な統語論的現象を、その根底で統御していることを例証することにある。ここで「心的態度」というのは、話者の、補文の真偽性に関する確信の度合が高い¹⁾、すなわち補文命題が、「発話の時点に先だつてあらかじめ確定した話題として話し手の意識の中」²⁾ にあって、このような命題に対して積極的、明確な態度表明を行なうか〔＝強心的態度〕、それとも、そのような前提を持たずに、補文を控え目、消極的に提示するか〔＝弱心的態度〕という認識のありかたである。³⁾ 以下、補文化子の選択、否定辞上昇変形、疑問詞移動変形など⁴⁾、複数の統語論的現象が、話者の心的態度のありようという認識論的・意味論的原理のもとに収斂することを、小説、新聞などの Korpus の分析を中心に例証したい。

2. 補文化子の選択：daß / ゼロ

freuen, wundern, bereuen, (ver)danken など、補文命題が、話者の意識の中で既に話題として確定していることを前提とし、そのような補文に対して一様に⁵⁾ 明確な態度表明を表わす述語では、補文化子 daß が義務的なのに対し、glauben, hören, hoffen, meinen, denken などにおいては daß は随意的である。

- (1) a. ich freu mich, daß wir zusammen zur Babuschka fahren. (W. Schnurre, DRzB)⁶⁾
b. *ich freu mich, wir fahren zusammen zur Babuschka.

1) 人は真偽性についての確信、知識を持たずに明確な判断は下しにくい。Grice (1975), Reis (1977) 参照。

2) 中右 (1983) S. 549. 中右氏が初めて補文の「既定性」という概念を提案し、言語分析に導入した。本稿の「心的態度」も本質的に氏の「既定性」の概念にその示唆を得ている。

3) 対極的に強か弱どちらかというのではなく、両者の間には連続性がある。

4) これらの変形に関わる経験的言語事実が本稿の対象なので変形の存否には立入らない。

5) glauben, meinen, hoffen, hören, denken, sagen などは後に示されるように強と弱二様の心的態度を持つ。

6) 紙面節約のため、作品名は各語の頭文字で表わす。

- (2) a. Ich glaube, *daß* auch andere Ministerpräsidenten dasselbe in drastischer Weise tun. (=daß 文) (Der Spiegel, Nr. 16, 1984)
- b. Ich glaube, auch andere Ministerpräsidenten tun dasselbe in drastischer Weise. (=ゼロ文)
- c. Ich glaube, ich bin schon einmal mit demselben Kutscher gefahren. (A. Schnitzler, DTs)
- (3) a. Ich höre, *daß* sogar der General Stefano Gritti mit diesem Instrument Wurzeln ausziehen kann. (B. Brecht, LdG)
- b. Ich höre, sogar der General Stefano Gritti kann mit diesem Instrument Wurzeln ausziehen.
- c. Ich höre, dieser Herr Galilei versetzt den Menschen aus dem Mittelpunkt des Weltalls irgendwohin an den Rand. (B. Brecht, LdG)

しかし、全く等価な文が複数存在するということは、言語の経済性という観点からも考えにくいわけで、*daß* 文とゼロ文両構文の間には、何らかの意味上、機能上の差異が存在すると考えられる。そこで、文のレベルでは潜在的な両構文の差異を探るために、まず、次の談話をみてみたい。⁷⁾

- (4) A: Prof. Brauns Vorlesung soll morgen ausfallen. Hast du das gehört?
 B: a. Ja, ich habe gehört, *daß* die Vorlesung morgen ausfällt. 有標音調 [↗ ↘]
 b. ?Ja, ich habe gehört, *daß* die Vorlesung morgen ausfällt. 無標音調 [↘ 休止 ↗]
 c. ??Ja, ich habe gehört, die Vorlesung fällt morgen aus. [↘ ↗]
- (5) A: Was gibt's Neues?
 B: a.(?)Ich habe gehört, *daß* Prof. Brauns Vorlesung morgen ausfällt. [↗ ↘]
 b. Ich habe gehört, *daß* Prof. Brauns Vorlesung morgen ausfällt. [↘ ↗]
 c. Ich habe gehört, Prof. Brauns Vorlesung fällt morgen aus. [↘ ↗]
- (6) (主人公の Gisela が友人 Ortrud から Möller 夫人が店をたたむことを聞いて夫人に詰めよる場面)
 Ortrud: Frau Möller ist pleite! Sie muß den Laden aufgeben!

 Gisela: Sagen Sie mal, Frau Möller, ich hab' gehört, *daß* Sie die Drogerie aufgeben müssen, . . . (W. Körner, IgnM)
- (7) Reporter: Was halten Sie von Weihnachtsbräuchen?
 A: Ich glaube, man sollte davon abkommen, teure Geschenke zu kaufen. [↘ ↗]
 B: Weihnachten ist schön und ich glaube, auch Erwachsene sollten sich freuen. [↘ ↗]
 C: Ich meine, man müßte die Jugend dazu auffordern, . . . diese alten Bräuchen zu übernehmen. [↘ ↗]
 D: Ich meine, daß viele Leute Weihnachten zu sehr als Pflicht ansehen. [↘ ↗]
 (Bietigheimer Zeitung, 24. Dezember 1983)

7) 談話構造【聞き手にとって既知—未知】と心的態度【話者にとっての既知度】とは多くの場合重なるので、特に不一致のとき以外分けなくても差し支えない。注 20), 25) 参照。

(4), (6) のように、補文内容が先行文脈に既に存在している場合、すなわち話題として明示的に確定しているときは、無標な音調⁹⁾ [↘ 休止 ↘] の daß 文やゼロ文は使われにくく、有標な音調⁹⁾ [↘ ↗] の daß 文が用いられる傾向がある。他方、(5) や (7) のように、補文内容が先行文脈に存在せずに、話者が発話して初めて、新たに談話に導入、提示される場合には、有標な音調の daß 文よりも、無標な音調の daß 文、ゼロ文の方がやや優勢である。このことから、話題として確定している補文命題に対する態度表明の場合は、有標な音調の daß 文が用いられやすく、主節に焦点があること、他方、そのような前提を話者が持たない場合は、無標な音調の daß 文、ゼロ文が用いられ、補文が焦点を形成することが察せられる。更に次の談話をみてみよう。

- (8) SPIEGEL: Glauben Sie, daß es Reiche gibt, die diese Botschaft verstehen? [↘ ↗]
BOFF: Bei uns gibt es das, besonders in der Mittelschicht: Ärzte, . . .
(Der Spiegel, Nr. 38, 1984)
- (9) A: Glaubst du, daß das Flugzeug bei diesem Nebel aufsteigt? [↘ ↗]
B: Sie fliegen heute bei jedem Wetter. (F. Dürrenmatt, DEdHM)
- (10) Aber meinst du, sie hätte mal vom Sterben gesagt? [↘ ↗]
Nein, nie hat sie das. Nichts. Gar nichts. (W. Schnurre, DRzB)

(8), (9), (10) の応答文は、いずれも質問文の補文に即して答えているが、これらは、質問文が無標な音調のときに自然な談話を構成する。このように、無標な音調の質問文に対して、その補文に即した応答が可能であるということは、質問文の補文が焦点であって、主節は意味的に希薄、透明 (transparent)¹⁰⁾ 挿入句的 (parenthetisch) であることを示唆している。

そして、最後に、次の談話である。

- (11) „Was ist denn in Summerhill besser als in anderen Schulen?“ Jack *kratzte sich am Kopf*. „*Weiß nicht*“, sagte er langsam. „Ich glaube, man kriegt da das Gefühl eines völligen Selbstvertrauens.“ [↘ ↗] (H. Kormann, ZDG)

„. . . *kratzte sich am Kopf*“ (=als Ausdruck von Verlegenheit, Ratlosigkeit (Dt. Universal Wb.)) という動作、*„Weiß nicht“* から、話者は補文命題の真偽性に関して確信を持っていないことがわかる。そして、そのような定義上弱い心的態度で話者はゼロ文を用いている。このことから、ゼロ文における主節は、陳述緩和的 (epistemisch) で、主張を和らげ控えめにする意味機能であることが察せられよう。これまでの談話の観察から引き出される仮説を簡略化して示すと次のようになる。

8) 「音調」は、文強勢、区切り(休止)、(狭義の)音調を含めた意味で用いる。幸田(1982)、Lötscher(1983)、Pheby(1975)、Schmerling(1974)など参照。

9) 談話構造上の要因で補文が主強勢の場合もあるが、その場合でも、無標の場合よりは強い強勢が主節におちる。

10) transparent, parenthetisch 両者とも Hooper(1975)による。

	弱心的態度	強心的態度
主 節	透明(挿入句的) (陳述緩和的)	不透明
補 文	発話以前には話題として未確定	発話以前に話題として確定
音 調	無標 [→ 休止 ←]	有標 [↔]
焦 点	補 文	主 節
補文化子	ゼロ / daß [→ ←]	daß [↔]

以下、この仮説の妥当性を検証し、更に精密化してゆきたい。

まず第一に、補文格上げ変形適用のありようである。この変形は、補文が機能的に独立文であって発話の焦点をなし、他方、主節は意味的に透明で、陳述緩和的、挿入句的であることを必要十分条件とする。さて、例えば、*glauben* には大きく分けて、1. *etwas für wahr halten* と 2. *etwas für möglich halten, vermuten*¹¹⁾ という二つの語義があるが、前者は定義上、強心的態度の読みであり、後者は弱心的態度の読みである。そして、格上げ変形を許すのは弱心的態度の場合であって、強心的態度の場合ではない。

- (12) a. Du warst ein bißchen isoliert, glaube ich. (M. Walser, Efp)
 b. *Du warst ein bißchen isoliert, glaube ich fest.
- (13) a. er hat auch, *glaube ich*, keine Antwort erwartet. (挿入文) (A. Andersch, GEvO)
 b. er hat auch keine Antwort erwartet, glaube ich (*fest).
 c. ich glaube (*fest), er hat auch keine Antwort erwartet.

この観察から、ゼロ文における補文の焦点性、主節の挿入文性が確認される¹²⁾。

第二には、話題化変形¹³⁾を適用した文では、主節を否定できるが、補文格上げ変形を適用した文では、主節を否定しにくいという現象がある。

- (14) a. *Daß* du so ein böses Herz hast, hab ich *nicht* geglaubt. (L. Rinser, DrK)
 b. Den kenne ich, glaube ich. (J. Roth, DLvhT)
 c. *Den kenne ich, glaube ich *nicht*.

話題化変形を受けた (14a) では、補文が話題で、主節がコメント、焦点である。したがって、補文についてのコメントである主節を否定しても、無理のない談話を構成する。それに対して、補文格上げ変形を受けた (14c) では、焦点が補文にあるために、主節を否定すると、一度焦点として補文を主張した後ですぐ、自らその主張を否定するという支離滅裂な発話となる。その結果、会話における協力の原則に反して不適格となるわけである。

第三には、話法詞 (Modalwörter) による焦点化の可能性の違いがある。

11) Istvan (1980). 強調は筆者。日本語では 1. 「信じる」「思っている」 2. 「思う」にほぼ相当。

12) Lang (1979) も文副詞との関連で、ゼロ文における主節と挿入文との共通性を指摘している。

13) 3. 2. で論じる。

- (15) a. *Ich *kann nie* glauben, *er ist tot*.
 焦点(化) 焦点
 b. Ich *kann nie* glauben, *daß er tot ist*. (M. Walser EfP)¹⁴⁾
 焦点(化)

(15a) の適格性が低いのは、ゼロ文においては、補文に焦点があるために、主節が焦点化されると、主節と補文それぞれに焦点が存在することになり、焦点の分散が生じてしまうことに帰することができる。他方、(15b) の *daß* 文は、話法詞がない場合、主節と補文のどちらが優勢 (dominant)¹⁵⁾ かということに関して潜在的に曖昧であるから、話法詞による主節の焦点化が可能なわけである。

そして、第四には、いわゆる「主節現象」が起きるか否かの違いである。主節現象は、機能的に主節である文、独立文に生じ、焦点を成す。つまり文内性質は不定 (indefinit) で、語順変換が可能である¹⁶⁾。裏返して言えば、主節現象が起きない文は、主節への埋め込み(従属)度、定性 (Definitheit) が高く、無標の語順 [主語・定動詞] をとり、語順変換が困難となる。補文が凝固性を増して、いわば「島」¹⁷⁾ を形成するわけである。

- (16) a. Ich glaube, daß *in zwei Jahren oder vielleicht sogar schon in einem* die Situation völlig anders wäre. [↗ ↘] ? [↘ ↗] (I. Bayer, J30)
 b. Ich glaube, daß die Situation *in zwei Jahren oder vielleicht sogar schon in einem* völlig anders wäre. [↗ ↘] [↘ ↗]¹⁸⁾
 (17) a. Du meinst, *von einem guten Gedächtnis* bekommt der beste Mensch einen schlechten Charakter. [↗ ↘] (R. Schickele, DgH)
 b. Du meinst, daß *von einem guten Gedächtnis* der beste Mensch einen schlechten Charakter bekommt. (?) [↗ ↘] ? [↘ ↗]
 c. Du meinst, daß der beste Mensch *von einem guten Gedächtnis* einen schlechten Charakter bekommt. [↗ ↘] [↘ ↗]

主節現象は、ゼロ文で最も起こりやすく、次いで無標な音調の *daß* 文であり、有標な音調の *daß* 文では起こりにくい。この観察は、ゼロ文では補文が機能的に主節性、独立文性を持ち焦点を成すこと、*daß* 文では、無標な音調、有標な音調の順に補文が島性を帯びることを端的に示している。

以上、本章では、補文化子の選択: *daß* / ゼロという統語現象をとりあげ、まず談話レ

14) 主節の読みは *für wahr halten* に一義的に定まる。なお否定辞だけでもゼロ文は不適格性が増すが、焦点が補文に存在することがあるので (3. 5. 参照) 助動詞が必要なのわけである。

15) N. Erteschik/S. Lappin の *dominance* の意味である。

16) Green (1976), Emonds (1976), Hooper/Thompson (1973) など参照。

17) 三瓶 (1983) 参照。凝固性、名詞性を含めた意味で用いる。

18) (16), (17) とともに原文の談話構造では、主節現象が起きている (16a), (17a) が最も適切だそうである (インフォーマント 5 名中 4 名)。Textualität の問題である。なお談話構造と補文内の語順について Lernerz (1977), Löscher (1981) 参照。

ヴェルでの daß 文とゼロ文のありようを観察することによって仮説をたて、次いで、その妥当性を一連の経験的事実を傍証として確認し、さらに弱心的態度の場合の daß 文とゼロ文の島性に関して若干の精密化を行なったことになる。

3. 心的態度と他の統語現象

前章までの分析によって、補文化子の選択という統語現象の背後に、話者の心的態度という認識論的・意味論的原理が働いていることがわかった。本章での関心は、他の種々の統語現象もまた、この原理の統御のもとにあることを例証することにある。それがうまくゆけば、少なくともその限りにおいて、この原理は、異なる複数の統語現象を統一的に説明するための原理的基盤となりうるといってよいことになる。

3.1. 文主語文

文頭の主語は、特定の解釈を受け、話題となり、あとにその話題についてのコメントが続く。¹⁹⁾ このことから、daß 補文が文頭で主語となる文主語文では、コメントとなる述語部が弱心的態度では意味情報的に希薄すぎるので、強心的態度であることが予測されるが、この予測が正しいことは、次の例によって裏づけられる。

- (18) *Daß Sie von Venedig aus aufsteigen*, Herr Blanchand, ist mir hochwillkommen. (E. Kästner, M)
- (19) *Daß die Versuchspersonen das wußten oder auch nur ahnten*, ist unwahrscheinlich. (A. Kluge, EL)
- (20) „*Daß ich mich nicht schwarzgeürgert habe*“, knurrte der Löwe, „ist ein wahres Wunder!“ „*Daß wir die Menschen zur Vernunft gebracht haben*, ist ein noch viel größeres Wunder“, sagte Oskar. (E. Kästner, DKdT)
- (21) **Daß Sie in einer Verlegenheit sind*, scheint mir.
- (22) **Daß plötzlich, wenn alle schlafen, die Tür aufgeht*, geschieht.
- (23) **Daß das Wort der alten Frau . . . ins Land gelangte*, erwies sich.

弱心的態度の場合は、外置 (Extraposition) が義務的なわけである。

- (24) *Es* scheint mir, daß Sie in einer Verlegenheit sind. (J. Roth, DLvhT)
- (25) *Es* geschieht, daß plötzlich, wenn alle schlafen, die Tür aufgeht. (H. Bienek, SiD)
- (26) *Es* erwies sich aber, daß das Wort der alten Frau ins Land gelangte. (G. Zwerenz, DLdzV)

この場合は、話題なし (themalos) で文全体を丸ごと新情報として提示する次のような提示文と同じタイプの文と考えられる。

- (27) (Aber was hast du denn?)
Es ist ein Wagen an uns vorbeigefahren. (A. Schnitzler, DTs)
- (28) *Es* war einmal ein König und eine Königin, die . . . (Brüder, Grimm, DzB)

19) 疑問詞主語、総称的主語を除く。なお、(不)特定の解釈と(不)定冠詞とは必ずしも対応しない。

なお、心的態度が強まり、主節の意味内容が複雑、不透明になってコメントとしての資格を備えれば、文主語文が可能となる。²⁰⁾

- (29) *Daß ihr Junge den Geburtstag vergessen hatte*, schien ihr von heimlicher Bedeutung.
(E. Kästner, PuA)
- (30) *Daß der Prisma zu flotter Gangart animiert*, ergibt sich aus dem drehfreudigen Motor ebenso wie auch der erstklassigen Straßenlage . . .
(車の広告, Prisma: 車の名) (Der Spiegel Nr. 38. 1984)

3.2. 補文話題化変形

話題化変形は、一般に、話題化される要素(ここでは「補文」)が話者の意識の中であらかじめ話題として確定していることを前提とし、その話題に対するコメントが続くようにする操作である。そして、変形を引き起こす要因としては、先行文脈とのつながり(Textkohäsion)の他に、強調、対照などがある。従って前述の文主語文と同じく、強心的態度であることが必要十分条件である。

- (31) . . . möchte ich dich ersuchen, uns die Beweggründe *deines heimtückischen* Unterfanges mitzuteilen.“ Da war's aber bei mir zappenduster! *Daß ich heimtückisch wäre*, hat mir noch niemand gesagt. (E. Kästner, EuddZ)
- (32) *Daß sie das tun konnten*, verdanken sie vor allem großzügigen staatlichen Zuschüssen. (Der Spiegel, Nr. 2. 1984)
- (33) Kinder, Kinder, war das eine kleine Küche! *Daß Anton ein armer Junge war* hatte sie sich zwar gleich gedacht. Aber daß er eine so kleine Küche hatte, setzte sie denn doch in Erstaunen. (E. Kästner, PuA)
- (34) *Daß seine Braut genauso lange verschwunden ist*, hat der gute Junge gar nicht gemerkt! (E. Kästner, M)
- (35) *Daß M.ÄRZ so schicke Strickjacken aus meiner Wolle macht*, will in meiner Herde wieder keiner glauben.²¹⁾ (羊の独白, MÄRZ: ファッションメーカーの名)
(Der Spiegel, Nr. 38. 1984)

3.3 疑問詞移動

疑問詞は文頭に先置される場合とそうでない場合がある。

- (36) a. *Wer* sagen die Leute, *daß* ich sei? . . . Sie sagen, du seiest Johannes der Täufer; . . . Ihr aber, *wer* saget ihr, *daß* ich sei? (Die Bibel, Das Evangelium nach Markus 8,9.)
b. *Was* meinst du denn, *daß* sie dir machen können? (B. Brecht, FuEdDR)
- (37) a. *Mit was*, meinen Sie, könnte ich Ihnen dienen? (B. Brecht, B)
b. *Wie*, glauben Sie, haben die anderen Leute auf den Film reagiert? (H. Stalb, B)

20) 実際の用例では、強心的態度でも外置文が多い。談話構造と心的態度の交差に依る。Mikame (1986 刊行予定), 注 25) 参照。

21) 商業広告文では、先行文脈がなくとも、補文話題化文、文主語文(例文(30))が用いられることがある。補文内容(製品の良さ)が読み手にとっても既知の前提であるという認識に引きずり込むための一種の共同体験の手法 (Strategie) であると考えられる。

- (38) a. Wissen Sie, *wer* die Dame im roten Kleide gewesen ist? (R. Schroers, DG)
 b. Wissen Sie, *was* Sie jetzt gemacht haben? (E. Jünger, DE)

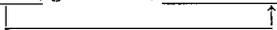
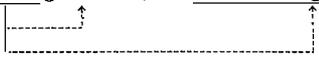
弱心的態度では、主節が透明な挿入句的読みであり、補文の島性が低いので、疑問詞移動、挿入句が生じるが、他方、強心的態度では、主節が不透明な非挿入句的読みで、補文の島性が高いので、疑問詞移動、挿入句が生じないと考えられる²²⁾。この考察の妥当性を裏づける傍証として次のような点が挙げられる。

第一に、強勢のありようである。

- (39) a. *Was* meinst du denn, *daß* sie dir machen können?
 b. *Mit was*, meinen Sie, könnte ich Ihnen dienen?
 c. Wissen Sie, *wer* die Dame im roten Kleide gewesen ist?

(39a,b) では、補文構成要素である疑問詞に強勢がおかれることから、補文に焦点があり心的態度が弱いことがわかる。他方、(39c) では、主節に強勢がおかれることから、主節が焦点を形成し、心的態度が強いことがわかる。

そして第二に、次の最小対立の文にみられる疑問詞の作用域の差異である。

- (40) a. Warum, glaubst du, hat er die Hose gekauft? (G. Stickel, (1974))

 b. Warum glaubst du, daß er die Hose gekauft hat? (G. Stickel, (1974))

 c. Warum glaubst du fest, daß er die Hose gekauft hat?

 d. Warum weißt du, daß er die Hose gekauft hat?


弱心的態度で、主節が透明な挿入句的読みである (40a) の場合は、疑問詞 *warum* の作用域は補文であり、(40c,d) のように強い心的態度で主節が不透明な読みの場合は *warum* の作用域は主節である。そして、(40b) は作用域に関して潜在的に曖昧であるが、弱心的態度、すなわち無標な音調で補文に強勢があるときは *warum* の作用域は補文であり、他方、強心的態度、すなわち有標な音調で主節に強勢があるときは *warum* の作用域は主節にある。このように、疑問詞の作用域が、弱心的態度のときは補文であり、強心的態度のときは主節であるということは、ひるがえって、弱心的態度における補文の非島性、強心的態度における補文の島性を浮き彫りにしている。

3. 4. 相関詞 (Korrelat) の出没

相関詞は、随意的に現われることが多い。

22) wissen は、im Gedächtnis, im Bewußtsein haben (Wahrig) という語義が示すように強心的態度が無標であるが、実は sicher と同じく弱心的態度の読みを持つ(特に起動相の場合)ことがある。Mikame (1986 刊行予定) 参照。

- (41) a. Er erinnerte sich nach langer Überlegung, daß er gestern ein Wunder erlebt hatte, ein Wunder. (J. Roth, DLvhT)
 b. . . . erinnerte er sich *daran*, daß er Kartak hieße: Andreas Kartak. (J. Roth, DLvhT)
- (42) a. Jeder ärgerte sich, daß sie die bevorstehende Entbindung nicht interessierte.²³⁾ (I. Bayer, J30)
 b. Jetzt, . . . , ärgerte sie sich nicht einmal *darüber*, daß Dieckmann sie in Köln eingesetzt hatte. (W. Körner, IgnM)
- (43) a. Sie bereute, daß sie nicht mitgegangen war. (Duden, Stilwb.)
 b. Heute bereue ich *es*, daß ich je mein offensichtlich mangelhaftes Gehör eingestanden habe. (M. Walser, FeM)

このように、知覚処理上などの必要性がないのに、話者が「わざわざ」(taking more effort)²⁴⁾ 相関詞を表出するということは、McCawley (1978) が言うように、話者がそのことによって、話者の認識のありよう、含意を明示的、強意的に聞き手に伝えたいためと考えられる。この推論をさらに煮詰めるために、ここで一旦、相関詞の基本定義に戻ってみよう。相関詞として使われる「代用形」(Pro-Form) は、定義上、指示物(Referenz)を、同定(Identifizierung)できることを必要十分条件とする。われわれのことで言い換えれば、指示物(ここでは「補文」)が話者の意識の中で既に話題として確定しているからこそ、代用形を、文字通り、その確定している補文の代わりに用いることができるわけである。そこで、先程の語用論的推論と考え合わせて、相関詞は、話者が補文命題を自分の意識の中で、既に確定した話題として認識していること、すなわち話者の強い心的態度を、明示的、強意的に表出するための言語手段であると推論できる。この推論を確証するものとして、無標では弱心的態度で相関詞をとらない述語でも、話法詞、否定辞、アスペクトなどにより心的態度が強まると相関詞が共起しやすくなるという現象(45)、(46)や、対照、強調という強心的態度で相関詞が使われること(47)、(48b)が挙げられる²⁵⁾。

- (44) a. Ich glaube, daß wir alle mehr von diesem Buch erwartet haben. (I. Bayer, J30)
 b. ??Ich glaube *es*, daß wir alle mehr von diesem Buch erwartet haben.
- (45) Ich habe *es* mir ja gedacht, daß Sie schlichten Gemüts gleich auf das Nächstliegende tippen werden. (B. Brecht, FuEdDR)
- (46) Ich kann's immer noch nicht glauben, daß es etwas wird, . . . (I. Bayer, J30)

23) Engel/Schumacher (1976) によると *sich ärgern* では相関詞が義務的になっているが、(42a) にみるように随意的である。

24) McCawley (1978), S. 245.

25) なお、相関詞が現われる一方で、補文がゼロ文のこともある: *Ich gebe es zu, es macht mir Spaß . . .* (B. Brecht, LdG). 話者の強心的態度の反映としての相関詞の使用と、談話構造: 新情報の要因によるゼロ文の具現である。

- (47) Ich halte . . . und *finde* eigentlich schade, daß es als Ware herauskommt. Ich weiß, daß das nicht zu ändern ist, aber ich *find'*s trotzdem schade, daß es jetzt als . . . auch noch verkauft werden muß. (I. Bayer J30)
- (48) a. Die Leute werden . . . eintragen und stolz sein, daß sie einen Schritt weitergekommen sind. (H. E. Nossack DM)
 b. Besonders stolz sind die Airbus-Verkäufer auch *darauf*, daß Pan Am den Flugzeugtyp A 320 bestellen will. (Der Spiegel Nr. 38. 1984)

3. 5. 否定辞上昇変形²⁶⁾

- (49) a. Ich glaube *nicht*, daß der Pfarrer seinen Namen kennt. (H. Böll, MuR)
 b. Ich glaube, daß der Pfarrer seinen Namen *nicht* kennt.

(49a) は曖昧で、二通りの解釈が可能である。一つの解釈は、

(50) Es ist *nicht* so, daß ich glaube, daß der Pfarrer seinen Namen kennt.

であり、もう一つの解釈は

(51)=(49b) Ich glaube, daß der Pfarrer seinen Namen *nicht* kennt.

と知的同義性 (kognitive Synonymie) を持つものである。このように知的同義な解釈が成り立つのは、以下に例証されるように、弱心的態度、すなわち無標な音調で主節が透明な場合であって、主節が弱心的態度でない述語や語法詞による焦点化で不透明になった場合は成り立たない。

- (52) a. Ich hoffe, daß das, was ich hier mitteile, *nicht* privat ist. (P. Bichsel, Li)
 =b. Ich hoffe *nicht*, daß das, was ich hier mitteile, privat ist.
- (53) a. Ich glaube, sie kommen *nicht* gern zu uns. (U. Wölfel, Z)
 =b. Ich glaube *nicht*, daß sie gern zu uns kommen.
- (54) a. Ich weiß, daß das *nicht* zu ändern ist. (I. Bayer, J30)
 ≠b. Ich weiß *nicht*, daß das zu ändern ist.
- (55) a. Du mußt *nicht* glauben, daß ich . . . mich drücken will. (E. Kreuder, DHvun)
 ≠b. Du mußt glauben, daß ich . . . mich *nicht* drücken will.

では何故、弱心的態度の場合にのみ知的同義な解釈が存在するのであろうか。理由は、心的態度が弱い場合には、主節が透明で補文の島性も低いので否定辞の作用域が補文にまで及んで補文否定が可能になるためと考えられる。このように弱心的態度の場合には、否定辞が補文を作用域としながらも、統語的には補文の外にあることが可能であり、そのために(49a)の語用論的含意²⁷⁾、すなわち、(49a)の方が(49b)よりも間接的、婉曲的

26) この変形の存在はかなり疑わしい。意味解釈の方が適切であろう。Bartsch, (1973) 参照。

27) 語用論的含意について Scheintuch/Wise (1976) 参照。なお弱心的態度の場合でも、sagen, behaupten, berichten, mitteilen, vorschlagenなどは、それほど弱くなく不透明さを内包するので、知的同義性は存在しない。

で丁寧な表現であるという語用論的含意が生じるのである。

以上、本章では、前章で検証された話者の心的態度という原理が、さらに多様な統語現象をも統一的に説明するための原理的基盤となりうることを例証したことになる。

4. まとめ

本稿の目的は、第一章でも述べたように、daß 補文を含む複合文において、話者が補文命題に対してとる心的態度が、daß 補文に関わる多様な統語論的現象をその根底で統御していることを例証することにあつた。そして、そのために、第二章では、まず談話レベルでの観察分析によって、補文化子 daβ / ゼロの選択という統語現象に決定的に関わる要因は、話者の補文命題に対する心的態度のありかたであるという仮説をたて、次いで、その妥当性を一連の経験的事実を傍証として確認した。そして、第三章では、文主語文、疑問詞移動、相関詞の出没などの他の統語論的現象もまた、この原理のもとに収斂することを示した。こうして、話者の心的態度という認識論的・意味論的原理の一般的妥当性に経験的な例証を与えたことになる。このような原理のもとに収束する言語事象にはまだ他に、関係詞の制限／非制限用法、接続法などがあり、また、統語的にも有意義な、心的態度に基づく述語の分類が可能であるが²⁸⁾、ここで立入る余裕はない。

話者の心的態度	← 弱	強 →
補文の島性	(斜線領域が弱から強へと広がる)	
主節	透明 (挿入句的) (挿入線形的)	不透明
音調	無標 [一休工]	有標 [レ工]
焦点	補文	主節
補文化子	ゼロ, daβ: [無標音調]	daβ: [有標音調]
補文格上げ変形	OK	*
主節現象	OK	??
文主語文	*	OK
補文話題化	*	OK
疑問詞移動	OK	*
相関詞	*	OK
否定辞上昇変形	OK	*

引用文例出典

Andersch, Alfred: Grausiges Erlebnis eines venezianischen Ofensetzers.

Bayer, Ingeborg: Johannesgasse 30.

Die Bibel des alten und neuen Testaments nach der Übersetzung Martin Luthers.

Bichsel, Peter: Lotte in . . .

28) Mikame (1986 刊行予定) 参照。

- Bienek, Horst: Stimmen im Dunkel.
 Böll, Heinrich: Mönch und Räuber.
 Brecht, Bertolt: Baal.
 Brecht, Bertolt: Furcht und Elend des Dritten Reiches.
 Brecht, Bertolt: Leben des Galilei.
 Duden: Stilwörterbuch der deutschen Sprache. 6. Aufl.
 Dürrenmatt, Friedrich: Die Ehe des Herrn Mississippi.
 Brüder, Grimm: Die zwölf Brüder.
 Jünger, Ernst: Die Eberjagd.
 Kästner, Erich: Die Konferenz der Tiere.
 Kästner, Erich: Emil und die drei Zwillinge.
 Kästner, Erich: Münchhausen.
 Kästner, Erich: Pünktchen und Anton.
 Kluge, Alexander: Ein Liebesversuch.
 Kormann, H. und H.: Zur Diskussion gestellt.
 Körner, Wolfgang: Ich gehe nach München.
 Kreuder, Ernst: Der Himmel vermißt uns nicht.
 Nossack, Hans Erich: Das Mal.
 Rinser, Luise: Die rote Katze.
 Roth, Joseph: Die Legende vom heiligen Trinker.
 Schickele, René: Das gelbe Haus.
 Schnitzler, Arthur: Die Toten schweigen.
 Schnurre, Wolfdietrich: Die Reise zur Babuschka.
 Schroers, Rolf: Das Gericht.
 Stalb, Heinrich: Brennpunkte.
 Stickel, Gerhard: Sätze vom Typ „Wann glaubst du, daß Hans kommt?“
 Walser, Martin: Ein fliehendes Pferd.
 Walser, Martin: Fingerübungen eines Mörders.
 Wölfel, Ursula: Die Zwillingshexen.
 Zwerenz, Gerhard: Das Land der zufriedenen Vögel/Ein modernes Märchen.

参考文献

- Bartsch, Renate: 'Negative Transportation' Gibt Es Nicht. Linguistische Berichte 27 (1973), S. 1-7.
 Emonds, Joseph: A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations. New York (Academic Press) 1976.
 Engel, U./H. Schumacher: Kleines Valenzlexikon deutscher Verben. Tübingen (Gunter Narr) 1976.
 Erteschik, S. N./S. Lappin: Dominance and the Functional Explanation of Island Phenomena. In: Theoretical Linguistics 6 (1979), S. 43-86.
 Green, Georgia: Main Clause Phenomena in Subordinate Clauses. In: Language 52 (1976), S. 382-397.
 Grice, Paul: Logic and Conversation. In: Syntax and Semantics. Hrsg. von Cole, P./J. Morgan. New York (Academic Press). 1975, Bd. 3, S. 41-58.
 Hooper, J./S. A. Thompson: On the Applicability of Root Transformations. In: Lin-

- guistic Inquiry 4 (1973), S. 465–498.
- Hooper, Joan: On Assertive Predicates. In: Syntax and Semantics. Hrsg. von Kimball, John. New York (Academic Press) 1975, Bd. 4, S. 91–124.
- Istvan, Kosaras: Grundwortschatz der deutschen Sprache. Budapest/Berlin (Tankönyvkiado/Volk und Wissen Volkseigener) 1980.
- 幸田薫: テーマ・レーマ構造と文アクセント〔静岡大学教養部研究報告——人文・社会科学篇第18巻第1号〕1982, 19–40頁。
- Lang, Ewald: Zum Status der Satzadverbiale. In: Slovo a Slovesnost 40 (1979), S. 200–213.
- Lernerz, Jürgen: Zur Abfolge nominaler Satzglieder im Deutschen. Studien zur deutschen Grammatik 5. Tübingen (Gunter Narr) 1977.
- Lötscher, Andreas: Satzaccent und Funktionale Satzperspektive im Deutschen. Linguistische Arbeiten 127. Tübingen (Max Niemeyer) 1983.
- McCawley, James: Conversational Implicature and the Lexicon. In: Syntax and Semantics. Hrsg. von Cole, Peter. New York (Academic Press) 1978, Bd. 9, S. 245–260.
- 三瓶裕文: 動詞の意味と談話構造——補文化子の選択と島の制約の場合——〔阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論叢』第25号〕1983, 1–21頁。
- Mikame, Hirofumi: Zur semantischen Klassifikation deutscher Prädikate und ihrer Relevanz in der Beschreibung deutscher komplexer Sätze.〔岩崎研究会編『竹林滋教授選暦記念論文集』〕1986 刊行予定。
- 中右実: 意味論(英語学大系5)(大修館書店)1983。
- Pheby, John: Intonation und Grammatik im Deutschen. Berlin (Akademie) 1980.
- Reis, Marga: Präsuppositionen und Syntax. Linguistische Arbeiten 51. Tübingen (Max Niemeyer) 1977.
- Scheintuch, G./Wise, K.: On the Pragmatic Unity of the Rules of Neg-Raising and Neg-Attraction. In: Papers from the twelfth Regional Meeting Chicago Linguistic Society 12 (1976), S. 548–557.
- Schmerling, Susan: A re-examination of 'normal stress'. In: Language 50 (1974), S. 66–73.